

壁塗り

壁
塗
り

登場人物

男

女

有力者

奥方

召使

町の人

語り

語り、登場。

あたりは暗い。

語り

「観客に向けて）皆さんに、思い出してみてください。

（やや声を小さく）難しいことはありません、少しでも思い出してください。
皆さんは、今日一日の始まりを、どこで迎えましたか？

目覚めたのは、どこですか？ どこから、今日という日は始まりましたか？

自宅のベッドの上？ リビングのソファ？ 恋人の腕の上？ もしかして、公園のベンチの上？

目が覚めて、一日が始まります」

語りの周囲、だんだんと明るくなっていく。

語り

「瞼の裏の真っ黒から、真っ白い明かりの中に、だんだんと景色が晴れて、ぼんやりとした視界に、色が入ってくる。

カーテンの色は緑でしょうか？ テーブルの色は肌色？ 掛け布団の色はピンク。ランプシェードの色は橙でしょうか？ 朝食は？ コーヒーは黒。卵は黄色。サラダはグリーン。ランチョンマット。青と赤のチェック。お皿の色は白でしょうか？ 朝食を食べ終わったら、身支度を整えます。
さて、ドアをあけましょう」

語り、大仰な動作でドアを開ける仕草。

語り

「（手を叩く。勢いよく）さあ、今日は一日何をしましょうか。

ドアの外の町の中に行きましよう。仕事に行きますか？ それとも誰かと遊び

に行きますか？ ただ歩いて散歩するのもいいでしょう。公園でぼんやりする
のでも、皆と一緒に走り回ってもいい。

自転車に乗りましょう。車でもいい。いつもの道。いつもの信号。赤青黄色の
ランプがパカパカパカと明滅している。

カンカンカンカン。踏切です。ガタンゴトンガタンゴトン。パアーン。満員電
車。窮屈でしようがない。でも、毎日のことです。

毎日毎朝、私たちは、ドアを開きます。

・・・ここに皆さんがいらっしゃっている以上、ドアを開けたはずです。ドア
を開けた瞬間から、我々は町に出ます。町に生きています。町の中で生きてい
ます。私の町があり、皆さんの町がある。いくつもの町が集まって、また大き
な町になる。電車に乗って、違う駅に降りると、そこはまた町です。いくつも
いくつも町があります。小さな町が集まって、中くらいの町に。中くらいの町
がいくつも集まって大きな町に。大きな町が集まって巨大な町に。巨大な町も
たくさん集まって、国になります。国がいくつも集まって、世界。

（少し間を空けて）・・・さて、町のお話をします。皆さんにお尋ねします。町
の果てとは、どこにあるんでしょう？ 地球の様に、町はボールみたいな丸い
形をしているのでしょうか？ まあるい形をしているのなら、果てなんてどこ
にもないんでしょうか？ いいえ、違います。果ては、あります。この町には
果てがある。ほら、そこに」

語り、
背後の白壁を指さす。

語り 「この町には果てがあります。これは壁です。何処までも続く、壁。横を見ると

どこまでも続いている。果てなんて見えない。上も、どこまでも続いています。
見上げて先なんて見えません。高すぎて見えない。てっぺんなんて見えませ
ん。壁がそそり立っています。巨大な壁、果てしなく大きな壁。世界の果ての
壁。

（やや静かに）大きな大きな壁。触った感じは想像にお任せします。煉瓦だろ
うがコンクリートだろうが漆喰だろうが、なんでもいい」

語り、
何かを指さす。

語り 「この壁の傍らに、男が一人立っています。彼の背後には町があります。彼は壁

に向かって突っ立って、手には白いペンキの入った大きなバケツとおんなじよ
うに真っ白いペンキがカピカピになるまでこびりについたハケを手にして、町
に背を向けて立っています。

町の人は彼に見向きもしません。誰一人として、彼のことを気にもかけません。彼も、町の人のことなど、気にしていないようです」

語り、後ろを向いて、男の様にぼんやりと立つ。

語り 「彼はいつも、ぼんやりとして、壁を眺めています。

そのうち時間になったら、あのハケを使って壁に白を塗り始めます。それが彼の仕事ですから。一日がはじまって、ドアの外にあるのは彼の場合、町ではなく、この、町の果ての壁のようです。彼にとって、町は、背中の向こうの世界。まるで背中に別の壁があるみたい。

彼は毎日毎日、壁を塗ります。雨の日も、風の日も、雪の日も、雷も、嵐も、町のお祭りも、クリスマスも、新年のお祝いも関係なしに、ただ、黙々と壁を塗り続けています。壁のことにしか興味なんかないと言わんばかりに。町の人も、彼のことなんか気にもかけません。ただ、孤独に、たった一人で。壁を塗っています」

語り、男の方を向いて、ペンキを塗る仕草。

語り 「(バケツにハケを突っ込んで壁を塗る動作) べちゃり、かんかん、べちゃえい、すう、べちゃり・・・」

やや、間を置いて。

語り 「今日も、彼は壁を塗っています。たった一色の白を塗っています。白？それは無色なのかもしれません。白い壁にただ、白を塗りたいくっているんですから、結局その色は無いのと同じなのかもしれません。」

語り、正面を向く。

語り 「壁塗り。

色を失くした、町の果ての壁を塗る、男のお話」

語り、男に声を掛ける。

語り(女) 「ねえ」

男の部屋。

恋人の女と二人で過ごしている。どうやら、女の絵を男が描いているようである。

女に向かって話しかける男。

女の声に反応する男。

女の声は聞こえない。

男 「ダメだよ。・・・ダメだって。ああ、もう、動いちゃだめだったら」

女 「(ねえ)」

男 「だから、ダメだって。君は動いちゃダメなんだ。いいかい？ 君はこうして僕の言ったとおりにポーズをとってくれないと。僕がいいよと言うまでね」

女 「(退屈だわ)」

男 「そんなことないさ、僕は楽しいよ。僕が楽しいなら、もちろん、君も楽しいんだと思うんだけど？ 違うのかい？」

女 「(男の楽しみに、すべての女が従うと思ったら、それは狭量と言うものよ)」

男 「狭量なのは今日だけさ。明日にはきつと僕の器は大きくなっているよ。ほら、大器晩成つてのは少なくとも、今日のこの瞬間のことを言っているわけじゃないんだから」

女 「(そんなのは屁理屈)」

男 「屁理屈も理屈さ。結局は折れた方の負け。でも、僕はまだ、絵筆を折ることなんか考えちゃいない。と言うことは、折れるのは君と言うことになる」

女 「(何故？)」

男 「決まっているさ、君は僕のたった一人のモデルで、唯一の愛する人で、僕は君以外の人物を絵のモデルにしたいなんて思ったことはない。だということは君は僕の絵のモデルを止めることなんてできやしない。だから僕は君だけの――」

語り、正面を向いて、

語り 「絵描き。」

この明るく適当な言葉を並び立てる彼は、壁の傍に立っていた、あの彼です。彼は、絵描きでした。毎日毎日、自分の恋人の絵を描いていました。好きなだけ、好きなように。一色ではなく、好きな色で、たくさんの色で。彼は、絵描きでした。ちなみに、これが彼の絵」

語り、絵描きの描いた絵を取り出す。

よくわからない落書きのような絵が描かれている。

語り

「さて、皆さんはこの絵をどう思いますか？ うまい？ 下手？ 奇抜なセンス？ それとも理解不明？」

『芸術とは、いつの世も理解しがたいものだ。』と、どこかの誰かが言いました。本当の芸術とは理解しがたいモノ。同時に、それを生み出した才能も理解が難しい。才能があるのか、ないのか。その判断はいたい誰が下すのでしょうか？ 世間様か、それとも、一流の文化人か。誰かの口にした言葉によって、あるものは才能があると呼ばれ、あるものは才能がないとレッテルを貼られる。

・・・少なくとも彼は、この町では才能のない側の芸術家だった」

男

「(女に向かって) さあ、今日はどんな構図にしようか？」

(女に話しかけられる) え？ ダメだよ、そんなポーズはありきたりだ。腕を上げて(女の腕を取る)・・・。

そう、そんな感じ。でも、ちょっと違うんだよなあ。どうだろう、そこで足もあげてみるってのは？ え？ 恥ずかしい？ 困るなあ、モデルは恥かしがっちゃいけない。文句なんか言ってもらっちゃ困るよ。ほら、早く、ほら」

男、にこやかに笑う。

語り

「アトリエに、笑い声。楽しげな笑い声。貧乏な芸術家の慎ましやかな暮らし。恋人と二人の、誰にも邪魔されない、素敵な時間」

男

「(女に向かって) 僕の絵はね、ちょっと難しいんだ。少し普通の人には理解が出来ない。ほら、(絵を取り出し) この姿を見て、君は君の姿が想像できるかい？ 出来ないだろう？ そこが味噌なんだよ。手前味噌だなんて言わないでくれよ？ 味噌っていうのはどんな料理にでも合うんだ。合わせ味噌ってのがあるくらいだからね。味噌っていうのはそれくらい万能なものなんだ。お湯に溶かして味噌汁にしてもいい。豆腐にかけてもいい。生の野菜なんてのもいい。カツだって。おでんにだって合うんだよ？ でも、土地柄によって、味噌よりも醤油の方が素晴らしいっていうところもあるし、ソースの方がいいって土地もある。それと一緒にさ・・・あゝ、なんの話だっけ？」

男、楽しげに笑う。

語り、絵を取り出す。

語り

「さて、今この瞬間、彼は貧乏で、才能のない絵描きです。絵の具一本買うのにも、一月丸々あくせく働いて、ようやく中古の誰かの使い古しを手に入れることが出来る程度。カンバスなんて、もうどのくらい新しいモノにしていけないかわからない。ボロのアトリエは今日も隙間風がびゅーびゅー吹いてくる。若いうちは苦労するものと良く言いますが、正直、こんな苦労はしたくない。そんな暮らし。」

でも、彼は幸せだと思っていました。この絵が売れなくなっただって、恋人の絵が描けるなら。それでよかった。

・・・ですが、彼はもうすぐ、金持ちで才能のある絵描きになります。さて、ここで皆さんに二つ質問をします。一つ目。彼の描いたこの絵にどのくらいの価値を付けるでしょうか？ 参考までに、僕だったら・・・（悩む）・・・まあ、自分で描いた手間もあるし、材料費も込みで・・・20000円ぐらいで。（切り替えして）まあ、そんなもんです。

次に二つ目。皆さん、成功することに大切なのはなんだと思いますか？ 才能？ でも、先にも述べたように彼にはこの町では才能がないと言うことになっている。お金？ 彼は貧乏人です。人当たりの良さ？ 確かにそれも重要です。しかし、彼は弁が立つが、本質的には自分の世界に閉じこもってしまうタイプだ。苦手じゃないが、得意なわけでもない。学？ 馬鹿では成功は出来ない。確かにそれはある意味真理です。しかし、学に時間を費やす暇があるのなら、彼は絵描きになんてなっていないでしょう。（手を大きくたたく）さて、成功するための条件とは？

・・・なんでしょう？」

ドアのノックの音。

男 「はい？ どなたです？ （ドアを開ける）」

男、驚く。

ドアの外には町の有力者が奥方、召使を伴い立っている。

男 「これはこれは、旦那さん。ああ、奥方様まで。こんにちは。こんな汚いところに何か御用でも？

（有力者に何か言われる）・・・え？ 僕の絵が見たい？ 何をいきなり・・・。そりゃあ、僕は絵描きです。・・・噂？ どんな？・・・そうですよ。そうです。僕の絵は誰にも理解してもらえない。そういう絵ばかりを描いています・・・。そりゃあ、買いたい手がないからたくさん余っていますけど。でも、そんな、旦那さんが満足なさるものなんてありませんよ」

隙を見て召使が部屋の中に入る。

男 「あ！ ちょっと！ 困りますよ。召使の躰はちゃんとしてくださらないと。（部屋の奥の召使に）ねえ、おい！ あんた！ 散らかさないでくれよ！

（有力者に）ねえ、旦那さん、僕はしがない絵描きです。でも、僕の才能は無いってことになってる。なんでそんなに興味がおありなのかわからない。

（何事か言われる）・・・はあ、・・・へえ・・・。だからって、この町の誰も僕のことを認めてはくれない。それでいいじゃないですか。僕の顔には団子を塗る隙間もないくらいに泥だらけなんだ。ほっといてください。静かに、彼女の絵を描ければ、僕は幸せなんですから」

召使、一枚の絵を有力者に手渡す。

男 「あ！！！ ちょっと！・・・はあ。勘弁してほしいなあ。まったく。手癖の悪い召使ですね。

（何事か言われる）・・・それ？ 恋人ですよ。綺麗に描けてるでしょう？（勢いよく口走るが自信を無くして）・・・と、僕は思ってるんですけど。いいんですよ、好きに言ってください。どうせ種火の紙ぐらいにしか役に立たない

んですから。ほら？ 旦那さんだって、そこいらの人たちと同じことを思うんでしょう？ 噂通りだって思っているんでしょ？

（有力者が、男の絵を睨み付けている）・・・なんです？ そんなにまじまじと見て。そんな大したことはないでしょう？」

語り 「さて、この後、町の有力者の大金持ちの旦那さんは、何と口にしたのでしょうか？ ここから彼は、とんとん拍子に出世するわけなんです時間が都合で、その様子をダイジェストでお送りします」

語り、有力者へ。その他、何役か演じる。

語り（有力者）「驚く」む！ これはなんと素晴らしい絵なんだ！！！！」

語り 「と、町の大金持ちの男が一言口にしました」

語り（召使）「おお、これは確かに素晴らしい絵でございます」

語り 「と、媚びうる召使が口走る」

語り（奥方）「あら、殿方がそうおっしゃるのなら、それほど素晴らしい絵なのでしょうね」

語り 「奥方様は絵のことなんか全然知りもしない」

語り（有力者）「君！ 君！ これは君！ こんなボロボロの部屋に押し込めておいていい代物じゃないぞ！ おお、噂を聞きつけてよかった！ 素晴らしい噂だつた！ 誰にも理解されない絵を描いている絵描きの絵。何も理解できるものすべてが素晴らしいわけではないというのは私の信念でもある。どうだ！ この絵は！ まるで私の信念を愚見化したようなものではないか！ 才能がある。断じて言うてやろう！ 君には才能がある！ この私を信用したまえ！ 君のような才能にあふれる若者を、私は探していたのだ！！！！」

語り（召使）「ええ、ええ、そりゃあもう旦那様の鑑識眼の素晴らしいさは町の者すべてが承知しております」

語り（奥方）「あら、殿方がそうおっしゃるのなら、それほど素晴らしい絵なのでしょうね」

語り 「大仰な噂はトントン拍子に転がっていきます」

語り 「転がった噂は噂を引き込み、つまり、噂は噂を呼んでくるわけです」

語り（町の人）「おい、聞いたか」

「なんだい？」

「大金持ちの買った絵の話さ」

「そいつは知らないな」

「あの大金持ちは古今東西の芸術品を屋敷の中にたんまり溜め込んでるんだ、そ

いつが認めた絵だ。しかもその絵はこの町の人間が描いたってんだ、ご近所さんに大金持ちに認められた絵描きがいるってことはこの町内の誇りってもんだ、これは見に行かない手はないだろう？」

「ご近所なのか」

「確かにそれは見ておいた方がいいかもしれねえなあ」

語り

「噂が噂を運んで、いつのまにか、彼の家の周りにはたくさんの人、人、人。人があつまればお金も舞い込んでくる。一間しかなかった彼の部屋はだんだんと大きくなって行って、とんとん拍子に庭園、使用人付の大きな御屋敷に。アトリエは使用人の部屋よりも大きなものを。それに伴い、転がる噂はどんどん大きくなっていく」

語り（町の人たち）「素晴らしい絵を見に行こう」

「素晴らしい絵を見に行こう」

「素晴らしい絵を見に行こう」

「素晴らしい絵を見に行こう」

「金持ちの言う素晴らしい絵を見に行こう」

「金持ちが言うんだから、素晴らしい絵に違いない」

「金持ちの間違わない」

「だって、素晴らしい絵だと言ったんだから」

「言ったからには素晴らしい絵なんだ」

「素晴らしい絵なんだ」

「素晴らしい絵は素晴らしくないといけない」

「素晴らしいと言われた絵は素晴らしいに決まっている」

「素晴らしい絵はきつと素晴らしいに違いない」

「素晴らしい絵は素晴らしい絵なんだ」

「誰がなんと言おうと素晴らしい絵なんだ」

語り

「もはや噂は転がるのではなくどこまでも広がっていきました。広がる噂はそれが噂だったのか真実だったのか、そんなことはどうでもよく、ただ、一人歩いていく。素晴らしい絵を見るために、町の人間たちはこぞって集まりました。隣町からも集まりました。隣の隣の町からも集まりました。みんな、彼の描いた絵を。素晴らしいと金持ちが言った絵を見に来ました。広がる噂は手足を得ます。千里を走り、走った先にうわさをばら撒き、ばら撒かれた噂はさらに千里走る。走った噂には尾びれも背びれもついて回る」

語り

「絵描きは英雄なんだそうだ」

「絵描きは3メートルもある大男なんだそうだ」

「絵描きは相当な美男子なんだそうだ」

「絵描きはスポーツ万能なんだそうだ」

「絵描きは10200を超えるそうだ」

「絵描きは歌がうまいらしい」

「絵描きは喧嘩も強い」

「絵描きは才能がある」

「絵描きには有り余るほどの才能がある」

「才能がなければ、これほどまでに素晴らしい絵が描けるわけがない」

「絵描きには素晴らしい才能があるに決まっている!!!!!!」

語り、やや、落ち着いて。

語り

「才能がある。という噂を、絵描きは着ていました。絵描きには才能が着せられていました。素晴らしい才能を、彼は着ていました。噂の才能は彼を上機嫌にさせ、上機嫌になった彼が今日も今日とて恋人の絵を描きます」

男

「僕には才能がある」

語り

「いつの間にか、それは彼の言葉になっていた。噂話の背びれは大きくなっていく、尾びれもどんどん太くなっていく。それは彼のモノではなかったはずなのに、まるで、最初から彼の一部であったかのように振る舞い、その度に彼を有頂天にさせた！」

男

「僕には才能がある！ 素晴らしい才能がある。僕自身でさえも気が付かなかった。ううん、違う。本当の才能っていうものは、自分で見つけるものじゃないんだ。きつと、人に言われて初めて手に入るモノなんだ。だったら、どうだ？ 僕の絵を素晴らしいと言ってくれる人たちがこんなにたくさんいる！ 僕の絵を嬉々として見てくれる人がいる！ みんなみんな、僕をたたえてくれている！ 僕は描くよ！ きつときつと、僕の目が何も見えなくなるその瞬間まで！ 僕の耳が賞賛の声を聞き取れなくなるまで！ 僕はずっとずっと、君の絵を描き続けるんだ！」

カンバスに向かい、女の絵を描く男。

語り

「いくつもの色が、彼のキャンパスに塗られていきました。赤、青、黄色、オレンジ、グリーン、シルバー、ゴールド、蘇芳、ターコイズ、シアン、つゆくさ、インディゴ、オールドローズ、くちなし、ネイビー、ピンク、ライラック、びやくぐん、グレー、メイズ、あさぎ、にびいろ、クリムゾン、くろがね、ラピスラズリ、カージナル、ぬれがらす、せいらん、セピア、マゼンダ」

色とりどりの色が周囲に飛び散っていく。

語りの色を告げる声は残る。

男、ひとしきり絵を描いたのち、一つ、ため息をつく。

男、絵を描いている。

男の部屋。

恋人の女の絵を描いている男。

女 「(ねえ)」

男 「ダメだよ。・・・ダメだって。ああ、もう、動いちゃだめだったら」

女 「(ねえ)」

男 「だから、ダメだって。君は動いちゃダメなんだ。いいかい？ 君はこうして僕の言ったとおりにポーズをとってくれないと。僕がいいよと言うまでね」

女 「(退屈だわ)」

男 「そんなことないさ、僕は楽しいよ。僕が楽しいなら、もちろん、君も楽しいんだと思うんだけど？ 違うのかい？」

女 「(男の楽しみに、すべての女が従うと思ったら、それは狭量と言うものよ)」

男 「狭量なのは今日だけさ。明日にはきつと僕の器は大きくなっているよ。ほら、大器晩成つてのは少なくとも、今日のこの瞬間のことを言っているわけじゃないんだから」

女 「(そんなのは屁理屈)」

男 「屁理屈も理屈さ。結局は折れた方の負け。でも、僕はまだ、絵筆を折ることなんか考えちゃいない。と言うことは、折れるのは君と言うことになる」

女 「(何故？)」

男 「決まっているさ、モデルなんかはいくらでもいる。でも、僕は、この町で唯一無二の素晴らしい絵描きなんだから」

語り、男の描いた絵を観客に見せる。

語り、微笑。

語り

「どうです？ 色鮮やかでしょう？ そして、より一層、不可解極まりない。まだ子供の落書きの方が統一感があるように思います。でも、これがこの町の天才名画家様の描いた絵なんです」

男、イライラと、

男 「ダメダメ！ こんな安物のカンバスじゃ、僕は描けませんよ。申し訳ないんですが、もっと上等な材料を使ってもらわないと。僕にお宅の娘さんの絵を描い

てほしいんでしょう？　だったら、それなりに上等なものを用意してもらわないと」

男、ヒステリックに怒鳴る。

男　「だから、何度言ったらわかるんです？　それはそこに置いちゃあいけない、僕は右利きだって言ってるじゃありませんか、あなたの目は何を見ているんですか？　ひょっとして、それはガラスの玉なんですか？　じゃあ、納得だ、僕の絵は僕の一番心地いい状態じゃないと仕上げる事が出来ないってそういうことがまるでわかっていないんだから！」

男、素晴らしい笑顔に。しかし、どこか他人を見下している。

男　「さあ、さあさあ、さあ、僕の絵を素晴らしいと言いなさいな！　当然だ！　素晴らしいという言葉以外見つからないだろう！　この絵はこの世100年、いや万年は語り継がれる作品だ！　万年経って、この絵が朽ち果てたとしても、僕の名前は後世に語り継がれる！　それは決まっている！　なぜなら僕は――」

語り　「才能のある、素晴らしい絵描きだから」

ドアをたたく音。

男、ドアを開く。

ドアの向こうには有力者。

男　「(最初は不審がるが、すぐに笑顔になって) おや、これは旦那さん、夜分にどうも。」

(何事か尋ねられる) え？　ああ、これですか？　新作ですよ。え？　モデル？　いやあ、今はモデルなんかいやしません。芸術の極みってやつです。モデルなんかなくなっちゃって、僕には素晴らしい才能がありますから、旦那さんが見初めてくれた僕の才能がね。え？　じゃあ、何を描いているのかって？　これですよ。これ」

男、壁を叩く。

男　「ずっと僕の恋人たちをモデルにしていたんですが、たくさんいすぎて、喧嘩が絶えなくなっちゃって、やれ、次は私の番だとか、早く代われだの、つまんな

いい争いが多くてね。ダメですなあ、どうも、恋人を相手に描くっていうのは、一人のうちはよかったですけど、二人三人と増えて、今じゃ、誰が最初の恋人だったのかも覚えちゃいない。ま、喧嘩しないで仲良く描かれてくれているなら問題なかったんですけど、めんどくさくなっちゃって、みんな家から追い出してやりましたよ。で、今は（壁を指して）これ。いいですよ。物言わないで、ただ、ここにいてくれる。真っ白の壁は僕に無限の想像力を与えてくれる。素晴らしいと思いますか？ これほどまでに完璧なモデルはいやしませんよ。・・・ところで、旦那さん、今日はどういったご用向きで？（有力者が何かを伝える）・・・はあ、奥方様を描くんですか？ でも、これまで奥方様をモデルにたくさん描いてきたじゃありませんか。まあ、お代さえないだければ、いくらでも描きますけど。・・・正直、あの方の絵を描くのはもう、飽きたんですよ。なあ、旦那さん、僕はね、そりゃあ、芸術家です。芸術家ですからなんだって描きますよ。描けるんですから。でもね、あんまりおんなじ絵ばっかり描くのも・・・」

有力者、男に何事か告げる。

男 「・・・え？ 外で描くんですか？ 見世物にする？
旦那さん、嫌ですよ。そんな、外なんかで描いたら、絵の具が乾きやすくなってしまう。絵筆の調子だって変わってしまう。そんないつもと違うところで描いた絵が、本当にいい絵だと思えますか？ いくら描き慣れている奥方様の絵だとしても、いつもみたいにうまく描けないかもしれませんよ？ それでもいいんですか？」

わざとらしく、いやらしい顔をする男。
ところが、有力者の続ける話に驚く。

男 「え！・・・！ あの方ですか！？ あの方が、僕の描いている姿が見たいって！？
本当に？ 本当にですか？ 本当に本当？ あ、そうですか、あの方、あの方に・・・いえ、お受けします。もちろん。お断りするわけがありません。
いくらでも描きますよ、いくらでも。いくらでも奥方様の絵を、これでもかというほど、美しく描いて見せますとも！
・・・はい、はい。では、また」

ドアの閉まる音。

男、しばらく呆然としているが、突然大喜び。

男
「ははははははは！　！！！！」

語り
「あの方、とは、とても有名な、画家でした。高名な画家、本当の才能を持つ、

画家。絵描きなら誰もが懂れる、そんな人物。なんの道楽か、彼が絵を描くところを多くの町人たちと見たいと申し出てきました。これには彼は大喜び」

男 「やった。これであの方に認められる。認められないわけがない。僕にはあの方

と同様に、才能がある。僕には才能がある。そんな僕の絵をあの方が見て、ほら、一言、『なんと素晴らしい絵なんだ』と、つぶやく。そうして次の瞬間には『彼の才能に比べたら、私の才能などちんけなものだ』

『ほら、皆の者、あの絵を見るがいい、あれこそが、本当の芸術と呼ばれるものに違いない、あれこそが本当の才能と言うものに他ならない』

『称えろ！ 彼の絵を！ 彼はこの町の誇り！ 人類の誇り！ あらゆる町の宝！ 彼の絵こそ、万年を生き抜く真実の才能に他ならない！』

歡声が聞こえてくる。

男に浴びせられる賞賛の声、それに答えるように手を振る男。

青い空。

気持ちのいい天気である。

語り

「とても良く晴れた日でした。青々とした空には雲一つなく、太陽の輝きが、キラキラと、町に降り注いでいました。それは、とても美しいと、思える光景でした。

絵描きは相当に洒落た服を着て、町の広場に赴いた。通りの広場の中心には大きなやぐらが組まれ、そのてっぺんに彼のために用意された一級品のキャンパスや絵の具、絵筆が置かれました。やぐらは花で飾られ、広場には菓子売りや大道芸人たちが集まり、子供たちは親に小遣いを貰って、わいわいきゃいきゃい騒いでいます。

町の人はさることながら、隣町、隣の隣町、もつともつと遠くの町からも、彼の絵を描くところを一目見ようと、それはもうたつくさんの人が集まってきました。そこいらじゅうお祭り騒ぎです。

やぐらのてっぺんには、奥方様がこれ以上もないほど華やいだ衣装を身にまとい、彼のことを待っています。

やぐらの正面に例の、大金持ちの御屋敷があります。右から左に歩くだけで5分はかかってしまいそうな大きな階段のてっぺんにお屋敷の入り口があつて、その入り口の前に豪華な椅子が二脚。片方に旦那さん。

そして、もう片方に、あの方」

男

「(つばを飲み込み) 緊張するなあ。緊張なんて、どれくらいぶりだろう。

(周囲の取り巻きに) ねえ、髭の剃り残しはないかい？ 髪は？ そうだよ、一等品の油さ。服は一張羅だけれど、大丈夫かな？ 派手すぎやしないかな？ センスを疑われたりしないだろうか？

・・・なに？ 大丈夫？ (ヒステリックに) あのねえ、君にセンスの何がわかるっていうんだい？ え？ 僕の絵の素晴らしさが君にわかるのかい？ そんな君が、僕の服の心配なんかしなくたっていいんだ。何様だい君は！」

語り

「(冷やかすように) カリカリピリピリ。周囲の皆に当たり散らすのは、自分のことを信用していない証拠かもしれません。本当は自分に才能がないと、ちょっとでも思っている証拠なのかもしれません。でも、そんなこと臆面にも出さず、いいえ、出すことなんかできるはずもなく、彼はやぐらのてっぺんに続く階段に足を掛けました」

男

「(階段をのぼりながら) 大丈夫。僕は大丈夫。大丈夫さ・・・ほら、大丈夫にな

ってきた。だって、僕は町の誰しもが認める絵描きなんだ。たった一人の稀有な才能。それを持った僕が失敗なんかするはずがない」

震える男。

ところが、一つの考えを閃く。

にやりと笑う男。

男

「(ボソボソと) そうだ、壁を想像しよう。

うん……。

奥方様を描くのはやめよう。そうだ、いつも描いている壁を描こう。

それが一番僕の才能を……。そうだ、奥方様なんてつまらないものよりも、僕の壁の方が素晴らしい。

……きつとあの方は僕に向かって、最高の賛辞を送るだろう。そうしたら、きつと僕の名前は町が続くよりもずっと長く響き続けるはずだ。だから、大丈夫。何も心配することなんかない。大丈夫、大丈夫」

男、やぐらのてっぺんで待つ奥方に一礼。

そして、あの方と有力者に一礼。

男、絵を描き始める。一生懸命描き始める。

夢中で描き続ける男。

と、何者かの声がかかり、男が手を止める。

男、『あの方』を見る。

『あの方』が席を離れているのが見える。

男

「『あの方』に向かって……どこに行くんです？ え？ ちょっと、僕の絵はまだ描き上がっちゃいない。ねえ、まだできていないんですよ！ 最後まで見ないでどこに行くっていうんです！？ ねえ！ ちょっと！ おーい！！！ 待って、待ってくださいよ！

（『あの方』が何か言う）……え？ 聞き取れない。なんて言ったんです？ ねえ？ ここからじゃあなたの声が聞こえない！

（やぐらのふもとの町の人に向かって）ああ、もう、うるさい！ お前たちの声が邪魔だ！ 静かにしろ！ あの方が、僕に向かって、何か言ったんだ！（何事かをひらめいて）そうだ！ トイレだ！ 今日は寒いから、それなら仕方ない。途中で席を立つても、またすぐに戻ってくるに違いない。ねえ、奥方様、少し、待ちましょう。ねえ、あの方が戻ってくるまで、少し待つことにしましょう。

（あの方を見て）・・・ねえ、そんな、やめてくださいよ。何の冗談なんですか！？
帰り支度なんて！？　お願いだから、僕の絵を最後まで見て行ってください
よ！」

周囲に静けさ。

町の人たちが蔑む目をしている。

男

「（周囲を見回して）・・・なんだ？　なんで、そんな目をするんですか？　ねえ、あなた方は僕を応援してくれたじゃないですか。ねえ、ねえ！！　（奥方様の視線に気が付く）何を見ているんです？　・・・なんですか？　その目は？　その目はなんだ！？　なんでそんな目で僕を見るんだ！！　僕が偽物とでも言いたいのか！？　偽物？　偽物の才能！？　僕が偽物！？　あなたに絵の是非がわかるものか！？　わかってたまるか！　旦那様の言葉をオウムのように繰り返していたあなたに、僕の絵の素晴らしさがわかるものか！？」

語り

「誰も、何も言いませんでした。何も。言葉を発しませんでした。ただ、あの方は、彼の絵が完成するよりも先に椅子を立ち、従者と共に帰ってしまいました。町の皆は何も言いませんでした」

男

「（町の人たちに怒鳴り散らす）お前たちに僕の才能がわかってたまるか！　こっちを見るな！　見るなったら！！　俺を見るな！　見ないでくれえええ！！」

男、逃げるようにして去る。男の持っていたスケッチブックだけを残して。

語り

「彼は叫び、やぐらを駆け下り、アトリエに彼は閉じこまりました。彼の目には何が映っていたのでしょうか？　彼の耳は何を聞いたのでしょうか？　アトリエに戻った彼は誰にも会おうとしませんでした。ドアに板を打ち付け、ただ一人、黙々と、絵を描き続けたといえます」

男、黙々と、自分の体に絵の具をぶちまける。

塗りたくり、塗りたくり、どんどん、彼の衣装が汚くなっていく。彼の顔も汚くなっていく。

男

「毎日毎日、描きつける、絵は素晴らしい。
美しき、色とりどりの絵。色彩は、果てしない世界のごとく、どこまでも、どこまでも。」

目が覚めた時の白、はためく翠、テーブルは肌の色、ベッドにはピンク、オレンジのランプシェード、彼女のコーヒーマグは黒く、焼いた卵は黄色だった！　青

と赤のチェックの服を着て、白い歯で笑っていた！ ドアを開けよう！

ドアの先の町の中の極彩色に、目を奪われる。まるで蝶々のように、自由にはためく、色、色、色、12色のクレヨンには24色の色鉛筆に変わった。やがて48色の絵の具に変わり、倍に増えた！

それは、苦勞の始まりだった！！

貧乏の病床は、生じた症状に状況を分別され、すなわち、情動と今日という二文字に変化していった。二文字はまるで蓋のように僕を色彩の中へと没入させ、没していった僕の心はそれでも、満たされていた。

それは、彼女がいたからだ！ いたいけな彼女の常識的な笑顔にむけてジョークと冗談を積み重ねる日々。それで満足だったんだ！ それで満ち足りていた！ 今日という日を満足に送っていた僕を、誰だ！ 誰が！？ 僕の絵には彼女が必要なんだ！ 誰が彼女を奪った！？ 僕の今日から毎日から彼女を奪った者を探せ！ どこかに逃げたのか！？ 卑怯者！？

逃げればいい。

逃亡は忘却からは逃れられない。しかし、この町には壁がある。壁があつては記憶は流れ出すことはない。壁は超えられない！ 壁は町の果てにあるのだ！ 僕の恋人を奪った僕の唯一のモデルを奪った、僕の幸福を奪った、お前たちは、誰だああああああ！！！！！！！！！！」

町の雑踏が聞こえる。町の人たちの声が大きくなってくる。

男、耐えきれず逃げ出そうと振り返る。

だが、そこには壁。

真っ白い壁。

沈黙。

語り、床に落ちた絵を見る。

そこには一面の白。

語り

「これが、彼の描いた、最後の絵です。皆さんは、この絵に何を見るのでしょうか？ これはこれで、才能があると解釈が出来なくもありません。

しかし、『あの方』は立ち去ってしまった。立ち去ったのは『あの方』だけではなく、人のうわさも、ほどけて消えて、彼の元から去っていききました。彼は、無名の、才能の無い絵描きになった。ほどなくして、大きな御屋敷もアトリエからも追い出されたそうです。恋人も、彼を慕う人々も誰も、いなくなつた。気が付けば、彼の名前を知る者も一人としていなかった。そもそも、最初からこの町に彼の名前を知っている人間なんて誰一人としていなかった。彼は、

この町にはいなかった。どこを探しても、才能に満ち溢れた絵描きなんてどこにもいやしなかった。色とりどりのうわさは、結局のところ、この、真っ白い絵の中に、消えて、なくなりました」

ざわざわと、雑踏。

語り

「壁のある町に、今日も今日とて人が歩きます。右から左、左から右。ドアを開けて、町に出ます。小さな町がいくつも集まって中くらいの町、中くらいの町が集まって大きな町、大きな町が集まって、巨大な町。巨大な町がいくつも集まって国。国がいくつも集まって、世界。世界の端っこのどこまでも続く壁のたもとに一人の男がいます。男は壁を白く塗るのが仕事です。

べちゃあん、がたごと、べちゃべちゃ、すう、べちゃり・・・

日がな一日町に背を向けて、壁に白を塗りたくります。男は有名な絵描きでした。町の誰もが知る、有名な絵描きでした。しかし、今では、彼のことを知っている者は誰一人としていません。彼に話しかける者も、誰一人としていません。そもそも、彼は本当に絵描きだったんでしょうか？ そんな疑問も、残りますが、とにかく彼は壁の色を白に塗っています。

べちゃあん、べちょん。すう、ぺたん」

語り、男を眺めて、

語り

「彼は、どれくらい色を手にしていないのでしょうか？ あれ以来、無色しか手にしていない彼に色を与えたら、どうなるのでしょうか？ 試してみましようか」

語り、適当な絵の具を取り出し、指に塗る。

語り

「皆さんは、この色にどんな想像をしますか？ この町の果てには真っ白い壁があります。真っ白いのは彼が、今日も今日とて勤勉に働いているからです。

真っ白い絵にたくさんのお色を一面に塗ったら・・・それは、ひよっとしたら、町のように見えるのかもしれない。

町には、たくさんのお人がいて、たくさんのお色があるのですから。真っ白い、壁と違って」

語り、男に向かって。

語り 「ねえ」

男、振り返る。

雑踏が聞こえる。

人の会話、笑い声、様々な音が飛び交う。

男、指に付いた色を見る。

男、町を見回す。

雑踏の音、より強くなり、

暗転。

終